

ぎっかけをつなぐ旅によう「パスポート」

PASSPORT.

NPO法人 ほっとハウス 特集

vol. 67
FREE PAPER
地域の出来事に触れる
ソーシャルマガジン



ほっとな場所へようこそ。



Editor's note 編集後記

ほっとな光が広がっていく旅でした。

知的障がい者の方とどう接したらいいのだろう?という不安を拭いてくれたのは、メンバーの方々の優しい言葉や真直ぐな気持ちでした。“知らない”ということが壁をつくる。ほっとハウスという場所の居心地の良さや人の温かさが、その心の壁を溶かしてくれました。地域も行政も巻き込みながら、誰かににとって必要な居場所でありつづけるほっとハウス。ぜひ皆さんもお店に立ち寄って、ほっと一息ついていかれてはいかがでしょうか?

— 長谷川 (構成/写真)

訪れるお客さまを「ほっ」とさせてきた「ほっとハウス」のあたたかさが、変化を持ちながらたくさんの人達に広がっています。お互いを理解しながら生きるとは、皆が気持ちよく過ごせる場所づくりになります。課題をクリアにしていくことは難しいながらも、より良いあり方へ前進するきっかけとなり、皆さんが仲間となっていく姿に感動しました。そして2019年はほっとハウス20周年だそうです!これからも長く、あたたかく広がり続けますように。

— 神倉 (デザイン)

NEXT ISSUE 次回予告 2019年1月配布予定。次回の旅も是非お楽しみ下さい。

とくしま市ほっとハウス TOKUSHIMA NPO CENTER

発行月 2018年12月
号数 67号
発行 徳島市市民活力開発センター
〒770-0847 徳島県徳島市幸町3丁目71番地の1 幸町会館1階
[TEL] 088-611-3886
[FAX] 088-624-3860
[mail] nposhimin@fm.nmt.ne.jp
[WEB] www.tokushima-shikatsu.com



↑昔ながらのチキンピザを食す 長谷川



↑コーヒーでまったりする 神倉

ABOUT PASSPORT.

“PASSPORT.”それは皆さんを特別な旅へと連れ出すチケット。行く先に広がるのは、団体の活動や人の想いに溢れた景色。見て、感じて、もっと知りたくなる。そんなぎっかけをつなぐソーシャルマガジン。これを手にする皆様に、どうか素敵な出会いがありますように。

See you next time.

この広報誌に関するご意見、ご感想は発行元である徳島市市民活力開発センター(088-611-3886)までご連絡下さい。

訪れたお客様を“ほっと”させてくれる、
とびっきりの笑顔。

お店に並ぶのは美味しいお菓子や
可愛らしい手作りの雑貨達。

その場所は誰もが
安心して過ごせるあたたかい場所。

いらっしゃいませ～

焼きたてです！
いかがですか？

バター多すぎ！
アラッ、減らしすぎた

ええ匂いに
つられたわー

ありがとうございます！
またきてください！

おいそう！
これもらうわ～

NPO法人ほっとハウスとは？

ほっ

2000年4月に知的障がい者の地域共同作業所として設立。
知的障がい者に対し働く場を提供し、生活訓練を通して社会に
適応する力を養う。翌年には菓子製造販売業許可を取得して
菓子販売を開始する。2006年9月に法人格を取得。
現在では焼き菓子や手芸品の販売を行い、地域の様々なイベ
ントで出店活動や小中学生との交流事業も行っている。
今年度からは徳島市との協働事業に取り組むなど、活動の幅を
広げている。

活動内容



喫茶店

- 喫茶コーナー
コーヒーやジュース、軽食が提供されている。
- 焼菓子コーナー
クッキー、マドレーヌ、カップケーキといった手作りのお菓子が販売されている。
お店だけではなく地域のイベントなどでも出店している。
- 手芸品コーナー
マグネットやぬいぐるみなど、可愛らしい手作り手芸品が販売されている。

NPO法人ほっとハウス 喫茶コーナー

〔住所〕 徳島市名東町3丁目257-1
〔TEL/FAX〕 088-633-8121
〔定休日〕 日曜・祝日・水曜日
〔営業時間〕 10:00～16:00



H P



MAP



交流事業

小学校へ訪問、中学生の職場体験、
地域行事への参加など、交流を通し
て知的障がいへの理解を深めてもら
う機会を積極的に創出している。

協働事業

徳島市役所との協働事業として、知
的障がい者のこと考慮した防災対策
に取り組む。行政とNPOが協力し、地
域課題の解決を目指す。



知ってもらおう大切さ

2018年1月19日、この日は中学生の職業体験受け入れの日であった。

店を訪れてみると、店内には30名ほどの中学生達が集まっていた。

クッキーとマフィン作り、手芸品の制作をほっとハウスのメンバーと共に取り組む。

1つ驚いたのは想像していた以上に、子ども達が楽しそうであったこと。

しっかりと手は動かしつつ、冗談も言い合ったりして店内には終始なごやかな雰囲気が漂っていた。

障がいも何も関係なく、一緒に作業をする仲間として目の前のことに取り組む。

この空間にはそんな当たり前が実現されていて、無理やりに交流するような流れをつくるわけでもなく、自然とその場にいる。それがなるとも居心地が良い。

松本さん曰く、この職業体験の目的は作業を体験することではないのだと。

ほっとハウスに通っているメンバーと一緒に作業を体験し交流することで、自身の目でその人達を見てもらいたい、感じてもらいたいのだ。

体験終了後に述べられた子ども達から感想の中には

「ずっとおりたいって思いましたー」

なんていう声もあった。

ほっとハウスという空間のあたたかさや迎え入れるメンバーの優しさが確かに子ども達の心に伝わっていた。



ほっとハウスの、
ほっとななかまたち。

焼きあがったカップケーキを取り出し、手際良く次の生地をオープンへと入れていく。



↑ 中学生の職業体験。ほっとハウスのメンバーの指示のもと、クッキーの制作に取り組む。

自分達の居場所

「おかえりー!!」

地域のイベントでの出店を終わってお店に帰ってきたメンバー達を迎えるその光景はさながら自分達の家のよう。彼女達にとってここが大切な場所であることは目で分かった。そこで松本さんは1つ昔話を聞かせてくれた。

「以前にも、もっと大きな施設で調理するようになってしまったことがあった。このこと違って広いし、たくさんクッキーとかを作れるようになるばみんなの作業手当も増えるし、好きな音楽でもかけながらやったら楽しいんちゃうかなあって思って。でも後々メンバーの子に聞いてみたら、前のほうがいいって、狭くて落ち着くあの場所の方がいいっていうんよ。ほれでよう分かった、あの子達にとって何が大事なかってことが。」彼女達にとってここはかけがえのない居場所であり、それはお金には代えることのできないものなのだろう。



↑ 作業中の様子。表情は真剣そのものだ。

細かな作業はお手の物。
↓ 均等に生地を分け、チョコチップを盛っていく。

ほっとする空間

「いらっしやい...まあ！
来てくれたんやなあ、嬉しいー!!」

満面の笑顔で迎え入れてくれたのはNPO法人ほっとハウスの理事長である松本さんだ。私がこの通いだしてもう何回目になるだろうか。コーヒートと手作りのクッキーを注文し、席に着く。店内には甘い香りが漂い、様々な手作りの手芸品が飾られている。こじんまりとしたこの空間には、いつもゆったりとした時間が流れている。

「ほっとハウス」は2000年4月に知的障がい者の地域共同作業所として設立された。知的障がい者が働ける場所をつくることも、周囲に彼らのことを知ってほしいのだと松本さんは話す。

「誤解や偏見をなくすには直接話すがええでえなあ。」

ほっとハウスでは小・中学生との交流の機会を設けたり、地域のイベントにも数多く参加しているようだ。



心から笑える大切な時間

「いつも思うんやけど得をしとることがいっぱいあるんよなあ。」

この活動のやりがいはいは何か？という質問に、松本さんはこう答えた。得をするとはどういうことなのか、更に話を深める。

「この子達はな、みんな考え方が素直というか、生き方が純粋やけん、そのまま出してくれるんよな。嬉しいってことやったり、ありがとうっていうことやったり、ほんとに綺麗な気持ちで向き合ってくれるんよ。こちの心が洗われるなあ。」

もらっているのはむしろ自分の方なのだ松本さんは笑う。それはきつとこの空間を、ここにいた家族達のことを、心から愛しているが故の言葉なのだろう。来年には20周年を迎えるほっとハウス。これからの意気込みを語る。

「小さな作業所やけど、あの子達にとっては大切な居場所やけん。ここがこれからもずっと続けていけるようにっていうのが願いやなあ。」



作業中も休憩時間も、いつでもこの空間には笑顔が溢れている。優しい言葉が飛び交う。



↑ワークショップの進行はグラフィックファシリテーターの玉有さん。議論された意見が次々と取りまとめられていく。



↑ワークショップの様子。みんなが抱く不安を解決するために、想像力を振り絞る。

NEW CHALLENGES STORY

新たな挑戦 — 知的障がい者の防災準備

徳島市との協働事業

制作した防災リュック。メンバーそれぞれの名前や絵が縫い付けられている。



ワークショップや防災ピクニックに参加した人の感想としては「災害時に必要なこと、今できていないことがよく分かった。」
「子どもだけではなく、親もどういう心構えが必要なのかを認識できた。」
「地震が起きたら子どもがすぐに机の下に隠れるようになった。」
といったことが挙げられた。
来年度からは防災ベストやヘルプマークの制作に取り組みつつ、関わる人や地域を広げていく予定だ。
市民（NPO）と行政の協働とはどういうものなのか？危機管理局の吉

本さんと田村さんは、協働事業が始まる前のことをこう振り返る。
「内容を見てとても必要なことだと思いつつも、難しそうだなとも思いました。」
「一緒に何かを作っていくということがどういうことなのか、それが見えてなかったですね。」
相手の顔も見えていない、どういう人で、何をしている人達なのか、そこに対しての不安はやはり大きかったという。しかしその不安は目を追うごとに解消されていく。
「何度も打ち合わせを重ねていく中で、ほんとハウスのことを知ってい



↑防災ピクニックについて、議論が交わされる。準備するもの、段取りについて入念にチェックしていく。

KEY PERSON



※協働事業

徳島市では行政とNPO・企業・学校・地域団体など多様な主体が連携して地域課題の解決にあたる「協働によるまちづくり」を推進している。

た。人柄や抱いている不安、直接顔を見てその人から話を聞くことで自分の考え方も変わった。」
最初はぎこちなかった打ち合わせの光景も、後になるに連れて少しずつ距離が近づいていく。意見や想いを交わし、ワークショップに向けて一生懸命準備が進められていく。資料の制作や会場の準備、広報についてなど、各々にできる役割が自然と分担される。それはまさに「パートナー」と呼ぶに相応しい関係性であった。
「やり方がすごく良かった。きつとこれが単純に防災リュックを作る、という事業ではこうはならなかったでしょうね。問を繋いでくださる人がいて、何度も顔を合わして言葉を交わし、一緒に目的に向かって進んで行けたからこそ築けた関係性なのだと思います。」

「災害時には自分がこの子達を守らないかん。そんなときにどうしたらいいのかというのが不安だったんよな。私に何ができるんだらうって。それをどうにか解決するための何かをしたかったんやけど、危機管理局さんのおかげで形になった。専門的な知識を教えてくれるし、私の想いを形にしてくれる。そして長谷川さんのように問を繋いで話を進めてくれたり、板東さんが資料を準備してくれたりもして。こんな人達がおつくれるけんこの事業ができよんなあつて、ほんとにありがたいです。」
市民と行政がタッグを組み、各々の特色をもつて互いを保管し合う。生み出された信頼関係が、地域の課題を解決し得る力となる。これこそが協働の価値ではないか、無限の可能性を秘めたこの取り組みが、今後更に広まっていことを願う。



↑制作風景。普段から手芸品の制作も行っているだけあって手馴れた手つきで準備を進める。

徳島市との協働事業、それはほんとハウスにとって初めての試みであった。テーマは知的障がい者の防災準備。もしも災害が起こり、避難所での生活を余儀なくされたとして、知的障がい者やその家族へのストレスや不安を解消するにはどうすればいいのか。その問題を解決するために、徳島市の危機管理局とともに取り組む3カ年の事業である。2018年の4月からスタートしたこの事業には、筆者である長谷川（徳島市市民活力開発センター）も運営に関わっている。
6月と8月には1回ずつワークショップが開催された。約40名の人が参加し、災害時における不安事項を洗い出したり、何を準備すればいいのか、どういう行動をすればいいのかと、について様々な意見が交わされる。
その後は防災リュックを制作し、実際にワークショップで出た意見を元に荷造りをする。11月にはそのリュックを背負って出かけるイベントを開催。防災ピクニックと名付けられたそのイベントには、実際に防災ズキンなども身に著け、リュックを背負って歩き、その中身についてもみんなで確認し合うなど、防災意識を高めるための経験が盛り込まれていた。

↓ワークショップの冒頭で行われた手話コースが会場に漂う緊張感を溶かしていく。

